

2022年7月10日 主日礼拝

説教題「神は『時』を選ばない」ヨハネ1章1～14節

主任牧師 加藤 誠

「言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった」(ヨハネ福音書1章4-5節)

先週の主日は北九州市のシオン山教会の教会創立百周年記念礼拝で説教の奉仕をさせていただきました。シオン山教会はちょうど百年前の1922年、西南女学院創設と共に西南女学院職員と学生のための教会として誕生した教会です。

1922年(大正11年)とはどのような時代だったのでしょうか。『日本バプテスト連盟史(1889～1959年)』によると、その2年前の1920年に「田中牧師遭難事件」が起っています。仏教系の国粹主義団体がキリスト教集会所を次々に破壊し、北九州市内の電柱には「教会に行く者の家は焼き払う」との脅迫文が貼り付けられたそうです。当時「売春」目的で働かされていた女性の救出に奔走していた田中種助牧師(若松教会)の牧師館を取り囲んで「国賊」「売国奴」と罵り、神社に呼び出した田中牧師の右眼をステッキで突いて重傷を負わせたのです。

やがて日本軍が中国大陸に侵略して排外主義がさらに高まると「キリスト教撲滅運動」が起こり、「耶蘇の学校が見晴らしの良い丘に建っているのは許しがたい」と西南女学院の校舎は日本軍に接収されて、学生たちは市内の他の学校の教室を間借りして授業を受けることを強いられました。しかし、そのように嵐のような過酷な時代においても「御言葉を語り続ける使命」を担ったのがシオン山教会でした。

聖書の御言葉とは「神の愛」であり、「イエス・キリストそのもの」です。神は御言葉を語るのに「時」を選ばれません。「今、この連中にはどんな祈りの言葉も通じないから、御言葉を語るのはやめておこう」とか、「今は、御言葉への反発が強いから、もう少しほとぼりが冷めたところに御言葉を語ることにしよう」ということはされません。主なる神にとってどれほど最悪で逆風が吹きすさぶときも、神は御言葉を語るための行動を起こされます。神の独り子が送られたのは、ヘロデ大王という、自分の保身のためには赤ん坊たちを見殺しにすることもいとわない残虐な王の時代でした。しかし、神は「ヘロデ大王の時代はあまりにも危険すぎるから御言葉を語るのはやめておこう」とはされませんでした。またイエス・キリストがエルサレムの都に上っていかうとされた時、弟子たちは「今はユダヤ人たちの間で、あなたへの殺意が高まっているから、ふさわしくありません」と忠告しましたが、主イエスは身の危険を承知で、敢えてエルサレムを目指して進んでいかれました。

初代教会が誕生した時もそうでした。主イエスが重罪人として十字架で処刑されて間もなく、まだ「イエスへの憎悪」がくすぶり続けていたエルサレムの町で「イエスの弟子」であることが分かったならば、どうされるか分からない危険がいっぱ

いの時期に、初代教会の人びとは「イエス・キリストそのもの」である「御言葉」をエルサレムの人びとに向かって語り始めたのです。

今朝、ご一緒に開いたヨハネ福音書の冒頭の部分は、「神の言」そのものであり、人間を照らす光であり、恵みと真理に満ちた神の独り子であるイエス・キリストを高らかに語っている箇所であると同時に、イエス・キリストはこの世から理解されず、認められず、受け入れられないことを明確に語りぬいている箇所でもあります。イエス・キリストは人間を照らす光だけでも、私たちは反発し、憎しみと殺意さえ向ける。恵みと真理に満ちておられるのに、私たちは理解しようとも受け入れようともしない。それはなぜか。その理由はこの福音書を読み進めていくと次第に分かることですけれども、私たちは光よりも闇を好み、自分たちの願いをかなえてくれる王は歓迎しても、私たちの罪を明らかにする救い主を嫌うからです。私たちは、ほんとうは見えていないのに「自分は見える！」と主張して、自分の罪を素直に認めて神さまの前に「ごめんなさい」とひれ伏すことができないからです。

けれども、そのような私たちを「この連中は、神に立ち帰る可能性はない」と諦めてしまうことも、私たちを「暗闇と偽り」の中に放置したままにされず、イエス・キリストは真の羊飼いとしてみなを神の愛に導くために、ご自分の命を捨てて、神の独り子としての栄光をその十字架において示されたのです。

神は「時」を選ばれません。私たちにとってどのような「時」であろうと、神は御言葉を語ることをお止めになりません。私たちにとってたとえ「最悪」で「最低」の時であったとしても、その「最悪」「最低」を通して神はご自身の真実の愛をあらわし続けられるからです。

ところが、私たちはそのときの状況やムードに大きな影響を受けがちです。社会が宗教に比較的寛容な時とか、自分の周りに信仰を好意的に理解してくれる人が多い時には教会に対して積極的な思いになれるけれども、一転して社会が宗教や信仰に不寛容になりだすと、とたんに足が遠のいてしまう。私たちの信仰というものは、実にそのときの社会、時代に満ちているムード、雰囲気というものに簡単に流されやすい。ですから主イエスはたびたび弟子たちに厳しく問いかけています。「人びとがわたしのことをどう噂しているかではなく、あなた自身はわたしをどう思うのか？ どう告白するのか？」と。主イエスが素晴らしい奇跡を見せてくれる時には熱狂的になるけれど、自分たちの思い通りには動いてくれないと分かるとたちまち「信仰心」がしぼんでしまう。なんとなくムードで、雰囲気、みんながそうしているから…ではなく、命の言として私たち人間を照らす光として来られたイエスをどう受けていくのか。告白していくのか。時が良くても悪くても、真の御言葉であるイエス・キリストへの信仰を証ししていく教会として立てられていきたいのです。